

巻頭言

くらしを語りあう会でのおしゃべり

田中 義二（愛知書房・地域と協同の研究センター食と農パネル世話人）

お月見が済んで1カ月。自宅からバス停まで数分の道すがら、川べりのススキが私の背よりも高く繁っている。帰り道。月明かりの夜は、橋から鯉が泳ぐのが見える。風にそよぐススキ、足音に鳴き止んだ虫たち……。行き帰りの20分足らずが、自然に接する唯一の時間だ。

なぜか忙しい（もっとも私の「あんたの勝手でしょ」の忙しさ）と身内はからかい、「世間的忙しさの裏返しだ」と私はぶつぶつ反論するのだが、やはり忙しい）。私ばかりではない。親戚筋の一人、40代は大企業勤務だが帰宅はいつも午前様。もう一人はリストラされて雇用者から「自営」へ。機材は自前。そのうえ単価が安いので長時間労働で補わざるを得ない。格差社会は身近にあるのだ。二人にはたまに逢うが、その度に顔つきが険しくなっている。文字どおり「心」が「亡」ぶ生活なのだろう。

いつの間にこんなことになったのか。はっきり見えるのは、高度成長期から。国の政策で農業は食えなくなり、都会に出て職を持つ。団塊世代の何百万人がそうした。やがて都市近郊に家を持つ。支払いには長期ローン。勤め先は企業競争に勝ち抜くためと言って、仕事の密度を上げ、なおかつ長時間働かす。しかし、ローンが済むまでは、会社を辞められない。黙って耐え、保身に懸命になる。たまに同僚とカラオケか居酒屋でストレスを発散する以外は仕事漬け。家のことはかみさん任せ、地域のことは役所任せ。選挙もどこか上から指示がくる。劇場に足を運ぶなんて別世界の人のことだった。

その世代が定年を迎えた今頃、厚生労働省がこんなことを言い出した。「草むしりや農作業など日常生活の中で積極的に体を動かすことを呼び掛け、健康維持につなげる」のだと。そんなことは働いている時に言え。遊びも知らないほど心をすり減らしたロボット人間を作っておいて、定年になったら遊び方を教えましょ、だと。人生丸ごとお国の管理下か。なめるな、と言いたいのだが、これも「あんたの勝手でしょ」の類か。

今、研究センター内で「くらしを語りあう会」を作っている。この世の出来事や仕組みをくらしの視座から見直してみようとする数人の集いだ。ここには議題はない。まとめもない。くらしにかかわる衣・食・住・つきあい・頭・心・体……どんなことでも話題になり、みなさんよくしゃべり、よく笑う。

だが、生協の集まりは昼間に限られている。よって女性主体だから、上述のような話は出ない。が、配偶者や子どもを見ていてお分かりのことだと思う。私は一度こんなことも話しあってみたいと企んでいる。というのは、上述の格差社会や長時間過密労働で人心がすり減っている原因は、「過剰な市場原理主義のもと、人間生存の基礎的条件をさえ足蹴にできる」社会のあり方にあって、これを解決できるのは「協同」の理念と行動だろう。と雑誌「世界」11月号が特集していることにある。内橋克人氏はそこで「いまこそ『協同』の出番と叫ぶべき」と述べておられる。ついでながら特集には「理念が後景に退いた生協に未来はあるか？」の論文も含まれている。本当か？ 次回の「くらしを語りあう会」はおそろくにぎやかな場になるだろう。虫たちが鳴くのをかき消すくらいに……。



研究センターNEWS

第3回「原発事故と私たちの暮らし」連続学習交流会

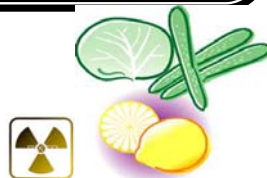
文責／事務局

『原発に頼らない 暮らしの見直しを』

高野雅夫氏 講演 分散交流会「おしゃべり」

—楽しくおしゃべり、今大切なことを考えあいました— 食と農、環境パネル

8月9日（木）にコープあいち、コープぎふ、コープみえの組合員、研究センター会員の方69名の参加で、食と農・環境パネル合同の公開企画として、学習交流会が開催されました。名古屋大学大学院環境学研究科准教授高野雅夫先生にお越しいただいて「原発に頼らない暮らしの見直し」と題してお話しいただきました。講演の後、8つのグループに分かれておしゃべりの会をもち自由に意見を出し合いました。概要を報告します。



開会挨拶より 食と農パネル世話人会座長 研究センター 山下 隆之 常任理事

今回3回目を準備する中で、原発の再稼働の動きも出てきました。電力のことは、私たちの生活に密接に関係しており、ひとりひとりの生活をどう見直すことが非常に大事になっています。今日は分散交流会として、皆さんに今やっている工夫、やっていきたいこと、身近なところから交流をすることにしました。日常のところで少しでも実践が進み、生活の見直し、エネルギーのあり方を考えていく事が大きな運動になるそうした契機になればと考えます。

高野雅夫氏 講演 概要

【 はじめに 】

今日は、今後のエネルギーどうしたらいいか、基本的な考え方についてお話ししたいと思います。考えるための知識とか考え方とかをお話します。原発に頼らない、暮らしの見直しという非常に大きなテーマですが、二つ手がかりとして、お話ししたいと思います。一つは、今福島で起こっていることをどうとらえるかということです。もう一つは、最近、田舎へ若い人が来始めまして、若い人たちと話をしていると非常に考えさせられることがありますので、それをヒントにお話ししていきたいと思います。

【 福島は今 】

福島第1原発から放射能が放出され、30キロ圏内が基本的に避難区域になったわけですが、それより外でも放射線量が高いところがありました。特に飯館村はすっぽり高い地域になり、阿武隈川の谷間で、伊達市、郡山、福島県の都心部が軒並み汚染されている状況です。大学や病院では、1時

間当たり0.6マイクロシーベルトの放射線がある場所は管理区域に指定しないといけませんが、それを越えた放射線量が測定されています。図（＝写真、文部科学省＆米国DOEによる航空機モニタリング戦力測定結果4月6日～26日測定）を見ますと、80キロ圏内が1.0マイクロシーベルトです。異常な放射線量だということがわかります。これは5月の状況で、今は半分くらいです。しかし、福島では今、普通にくらしています。誰も線量計を持っていません。そこで飲み食いして、遊んで、寝て、仕事をしているわけです。大学の中だと許されない大変な問題になるのですが、普通にくらしています。

5%くらいの子供が自主避難したと言われています。こうした親の気持ちは如何なものか、少しでも知ってほしいので、ブログの記事を紹介します。「友人や親戚から、福島にいて子どもたち大丈夫なのと聞かれます。私もこれでよいと思ったことは一度もなく迷っている生活です。何度も福島を離れようかと考えました。自分の子どもが病気になったらどう責任をとると言われると、言葉がありません。私の選択は、子どもたちを殺そうとしていることなのかと考えることがあり、つらい日々です。」「遠方に子どもたちを避難させたことはほとんど誰からもよいと言われたことはありません。毎日迷っています。心配がなくなるわけでもありません。」この状況がこれから先、ずっと続きます。これが、今の福島の姿です。

いずれにしても、みんなが迷っている状況です。1年間泣いてくらしていた人がたくさんいますが、それが一番まずいと思います。不安な気持ちというのは、人間を病気にしてしまい



名古屋大学環境学研究科准教授、地球科学博士、「全地球史解説」研究プロジェクトに参加、地下資源が枯渇した1000年後でもやっていける「千年持続学」を構想、実現する活動参加。

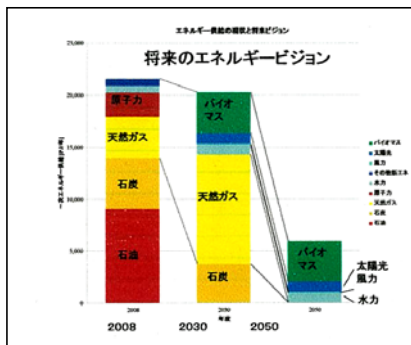


ます。おかあさんがそうだと子供は病気になります。放射能がなくても親が不安だと病気になるのです。安心しないが不安にもならない、そういう境地で生きていくしかありません。これは仏教の話で、お釈迦さんが悟った境地です。これを中道（ちゅうどう）と言います。お釈迦さんが悟ったような生活を、福島の人々がしないといけないうことです。

【 2030年、2050年のエネルギービジョン 】

これからエネルギーをどんなふうにしたらよいかを考えたいと思います。2008年のエネルギーの使い方は、石油4割くらい、石炭、天然ガス、原子力、水力、その他になっています。エネルギー利用の歴史は誰がつくってきたかというと、それは政府です。政府のエネルギー政策で決まっています。「これでよいですか。」と聞かれたことは一度もありませんね。これを変えるには、政策を変えないといけません。国民が「こうしたらよい」という提案を出して、議論して決める必要があります。最終的には国会で決めることが必要だと思います。

これは、私の個人的な提案です。2030年くらいには石油を使うのをやめましょう。原子力もうやめましょう。



天然ガスはしばらく使えるので、つなぎで天然ガスを増やします。2050年には、天然ガスもやめましょう。すると自然エネルギーだけになります。水力、風力は少ないですが、太陽光と、大きいのはバイオマスです。こうなると、自然エネルギーが100%になります。しかし、量が4分の1くらいになるのが問題です。40年後ですから、若い人、2050年に責任を持てる人に議論して決めてもらえばよいと、私は思います。ちょっとやさそとの節電では足りません。くらしのあり方、社会のあり方を根底から作り直さないといけないうことです。

何故ものすごい勢いでエネルギーを使うようになったのでしょうか。それは都市化と裏腹なのです。都市のくらしは何でも分業です。専門以外のことはお任せで、関心の持ちようがありません。電気は電気代を払えば、スイッチを入

ればつくのが当たり前で、つかなければ文句を言います。隣で何をしているか、誰なのか知りません。豊かなくらしをしているのは、地下資源を汲みだして使っているからです。地下資源を使って商品を作って、それを消費するからです。今、この部屋を見渡すと、ほとんどのものは地下資源でできています。それは使い終わると廃棄物になります。地球のどこかにためることになるのです。

一方で、私たちは生態系から資源をもらっています。紙や木です。木は切り株から芽が出て、20年経つとまた元の大きさになります。これを再生可能と言います。食べ物も生態系からもらっています。食べた後、廃棄物になっても上手にやればもどせます。昔は、うんち、おしっこも、農家が集めて肥やしとして田んぼ、畑に入れていました。そういうことをやればぐるぐる資源が回ります。地下資源を使わなければ、なくなる心配をしなくてもよくなります。ゴミの問題も解決します。生態系にものもらって、生態系に入れて生態系で再生するのが、千年持続可能な社会です。これをめざしていきたいと思います。

【 若者が田舎ぐらしを選択して移住 】

田舎に若い人、町で生まれ育った20代、30代の人に移住して来ています。政府の統計にも出ていて、農山漁村に移住する願望がある人が一番多いのが20代です。都市に住む20代の8%の人に願望があります。実際に、田舎に行くとそういう人が目につきます。そういう人と話をすると面白くて、何故こんな田舎に来たかと聞くと、ほぼ同じ答えが返ってきます。それは、「町にくらしていると、全部お金で買ってくるさなければならない。まずお金を稼ぐ。そういうくらしがいやになった。田舎に来て、田んぼや畑でできるだけ自給してくらし、食べる米と野菜は売って、裏の山で薪をとってくらす。自分のくらしを丁寧に、心を込めてやっていきたい、それで田舎に来た」というものです。ただ、お金がないと田舎でもくらしえない面もあります。田舎にいますとまず自動車が必要です。1世帯、若い夫婦と子供くらいで、月10万円くらいあればくらしえますね。どうしても必要なのは、車の維持費、水道光熱費などで5万円くらいです。あと5万円くらいは町に行って仲間と交流するのに必要です。世界観、価値観が私たちと違っていますが、そういう若者が増えています。

【 小水力発電による30Wでのくらしの実験 】

この話の流れで自然エネルギーを考えたらどうかというのが私の考えて、私の研究のひとつです。岐阜県揖斐川町の農業用水路に40センチの溝に水が流れているので、らせん水車のタイプの発電機をそこにはめて電気作ってみようという研究したのです。そしたら30Wの電気を作ることができました。30Wというと、蛍光灯一本がつくつかないくらいです。たいしたことないと最初は思いました。しかし、発光ダイオードで作ってみたら、結構明るくて、一つ2Wで、30Wなら15個作れるので、結構照明ができます。古民家の照明は水力発電で賄えました。照明が要るのは夜だけですが、水はずっと流れています。昼はバッテリーでためておきます。どこまで



やれるか挑戦しました。最低何が必要かと考えると、小さな冷蔵庫は必要です。テレビはなくてもよいがインターネットが必要なのでノートパソコンとモデムが要ります。どうしても洗濯機は要りますから、二層式の洗濯機を買ってきて、住む実験をしました。普通にくらせました。30Wは極端ですが、100Wあれば、普通の大きさの冷蔵庫と普通の洗濯機でくらせます。

電気だけでなく、暮らし全体を自然エネルギーでやれないか、豊田市の足助にできた公共施設の「すげの里」で、チャレンジしています。この建物は、エアコンがないので、なくても夏涼しく過ごせるように工夫してあります。床下がなくて、地盤の上に遮蔽シートが敷いてあり、その上にコンクリートのベタ基礎、床暖房パネルがあって、部屋になっているのです。地下5mはほとんど温度変化がありません。地下は年中14度です。今、行くと、床に寝っ転がるのがいちばん涼しいです。エアコンなしでも大丈夫で、去年8月8、9日のいちばん暑い日に、室温で26～7度です。部屋の中に入ると温度変化はほとんど感じません。

【 千年持続可能な社会へ 】

都市には若い人たちの不安があります。田舎に移り住みたい若い人が増えてきました。田舎の人たちは幸せにそうにくらしていて、田舎の幸せを都市の人にわけてあげるのが、過疎問題への対応だと思います。

こういうことをみんなで応援していこうと「千年持続学校」を立ち上げました。若い人が田舎に住むための学校です。住まいづくりの講座を開催しています。裏山の木を切って、家をつくります。労力・技術を提供して、間伐材、自然エネルギーを使って、みんなで働いて家をつくります。現在27組の方がつくっています。電気も太陽光発電で、電気会社とは契約をしません。バッテリーに溜めてそこから使います。作業用のソーラーパネル実験も始めました。1年半くらいで1軒の家をつくります。受講生の中から1年半で一帯移住するというプログラムです。受講生たちの中には、田舎にくらしたくて待っていられなくて、空き家に入って移住している人もいます。去年の9月から始めたのですが、来年4月までに計7世帯21人が移住する予定です。そういうことが起こり始めています。

原発なしで自然エネルギーでくらそうというとき、社会のあり方を根底から変えないと、4分の1のエネルギーでくらすというのはあり得ません。たいへんなことのように思えますが、積極的に選択する若い人たちが出てきて、彼らにとって、それは無理でもなんでもない、楽しいことなのです。エネルギーを使わないくらしが楽しいのです。薪でくらすことが楽しくて田舎に来ます。そんなふうにならなければ、40年後、社会全体がそうなっているというのは、あながちあり得ないことではありません。私などは、そういう若い人に学ぶばかり。価値観を変えろと言ってもなかなか変わらないものですが、彼らは変わっています。そういう価値観を自然に身につけて田舎に来ています。私たちは勉強するばかりでだということ、話を終わります。

高野先生のコメントより

話し合い、いかがでしたか。何か、話をまとめるわけでもなく、結論を出すわけでもなく、おしゃべりをしたのですが、こんな話し合いはあまりないのではないですか。珍しかったと思います。

生活を見直すのにいちばん大事なことは何でしょうか。社会を根底から見直すためにどういう学びをすればよいのでしょうか。学ぶことは一番大事です。偉い先生が答えを知っていて伝えるということはあり得ません。福島で原発事故が起きて、専門家が何か言うとか胡散臭いという状況が起きました。どうしたらよいかは、みんなが考えるしかありません。エネルギーをどうしたらよいか、くらしをどうするか。みんなの心の中に答えは少しずつ配られていると思います。そのためには、こういうやり方が一番いいという結論を出しましょう。決めるのではなく、ただただおしゃべり。そういうやり方を、生協の活動の中にも取り入れてもらえればよいと思います。

おしゃべりの分散会での話題

- ◆主体的に考え、行動する事の大切さも確認。特に、2030年、2050年のエネルギー政策について、3生協組合員ビジョン検討などの必要性もある。
- ◆いまだきの若者が、消費に走らない・・・という点で盛り上がった。
- ◆組合員が出資して、事業を行うことで脱原発を促す事も出来そうだ。
- ◆くらし方の見直しは工夫しだい。日常の工夫を交流して、参考になった。
 - ・風呂の残り湯を洗濯に使う、その残りは庭にまく。
 - ・生ゴミはコンポストに入れ、畑で肥料にして使う。
 - ・緑のカーテンとしてゴーヤを植え、太陽熱温水器。雨水活用
 - ・南側、日よけに雨戸利用。・冬にイチゴは食べないし、通勤は往復20kmを自転車。冬のコタツ、夏のクーラーなし。太陽光発電の設置、雨水タンク設置、緑のカーテン、「消費電力の見える化」など。



合同世話人会での振り返り より

エネルギーのあり方やくらしの見直しが大切だ。それは、我慢する生活ではなくて、エネルギーを際限なく使うくらしの無駄をなくし、くらしの工夫をして楽しく変えることだ。

経済をどう変えていくか、変えられるのか、医療や福祉、教育の問題も考えていく必要がある。

原子力に頼るくらしでなく、エネルギー自給や省エネの事例からくらしの見直しを考える、このような学習会やおしゃべりの会の内容をひろげる必要がある。

私のくらしの中の生協商品2 ～第7回生協職員の仕事を語る会～

2012年9月9日（日）、ワークライフブラザレある大会議室に於いて、研究フォーラム職員の仕事を考える世話人会主催で、第7回生協職員の仕事を語る会「私のくらしの中の生協商品2」を開催しました。今回のゲストスピーカーは、コープあいち3人、コープぎふ1人、コープみえ1人で計5人の組合員さんに参加いただき、いろいろお話いただきました。その一部をご紹介します。

文責：事務局



インタビュー
ゲスト

コープあいち組合員
コープぎふ組合員
コープあいち組合員
コープあいち組合員
コープあいち組合員
コープみえ組合員

中村 依子（なかむら よりこ）さん
仲西 佳子（なかにし けいこ）さん
伊藤 美希（いとう みき）さん
松山 恭子（まつやま きょうこ）さん
福地 千香子（ふくち ちかこ）さん
白水 三津代（しろうず みつよ）さん

中村（インタビュー）：職員と話をしてよかったというようなことはありますか。

福地（ゲスト）：最初の担当者の方が、毎週、その人が「休日をどんなふうに過ごした」とか、「今週こんなのがお得で、こんなふうに食べたらおいしいです」とか、「こんなふうに僕は食べています」とかいうお手紙を毎週入れてくれました。ちょうど27歳の息子と同世代で、息子とはあまり話さないの、同じくらいの年代の子が、どんなことを考えているか、どんな休日を過ごしているか、おもしろくて毎週楽しみにしていました。そんなふうにふっと引き込まれました。内容もおもしろかったのがそれが楽しみでした。

中村（インタビュー）：他のみなさんのところで、担当者ニュースは入っていますか。

仲西（ゲスト）：前の変わられた担当さんですが、自分と同年代くらいの方の職員さんで、担当者ニュースを、毎回、「休みに何しています」とか「娘が結婚しました」とか自分の身の回りのことを書いていました。お正月だと「3段重を食べた」とか書いてあると、試そうかと思うし、ニュースを話題に話すことができました。よかったのですが、それから3～4人変わられたのですが、毎週担当者ニュースを入れてくれたのは、その方だけでした。

中村（インタビュー）：商品案内はどれくらい見られますか？さっと見て、欲しいものだけ注文するという格好でしょうか？それとも、じっくり見られますか？いかがでしょうか？

仲西（ゲスト）：配られたカタログは全部目を通します。おススメのひとつは見ますが、検査センターのコラムまでは見てないと思います。量が多いのと、雑貨も二冊

になりましたので、「前もあった」「あっちにも載っていた」と戻ったりして、結構煩雑なので、一冊でいいかなと思います。見るのに30分とか時間とられちゃうので、大変だと思います。毎週です。

福地（ゲスト）：私はカタログを見るのに、2時間くらいかかります。1日では見ることができず、3日くらいで見ます。欲しいものにをつけます。商品案内は、その週のおススメ商品が一番上に載っていますので、まずそこから入ります。

伊藤（ゲスト）：私は、商品案内を袋から出して、まず要らないのからどけて、たいていは、「キャロット」と雑貨はパツと飛ばして、必要なのが載っていないかなと見て、今要る商品があるところまで飛ばします。その後、食品だけじっくり見ます。後ろの方に載っているおススメ商品は、一番身近な声だと思うので、時間があれば丁寧にしっかり見ます。検査センターの話は、よほど興味がある内容なら見ますが、そうでないなら飛ばします。メーカーの話も、興味がある商品だとサーッと読みます。

松山（ゲスト）：私も、商品案内は楽しみに見ている方だと思います。食品の商品案内は楽しみなので最後にとっておきます。雑貨の方も2冊、ちょっととおきます。「必要な？」「どうかな？」というチラシをみて、それは一回だけで、後は商品案内を見ます。まず、「トクだね」とか安いものを先に見ます。共同購入のシステムだと、欲しい時に欲しいものがないことがあるので、安いとつい買ってしまっ

て、まだ在庫があったり



福地さん



中村さん



伊藤さん

しますので、それがちょっと困ったことですが、最近賢くなって安いのがあったと在庫をチェックするようになり注文を考えるようになりました。

中村（インタビュー）：前回の語る会で、「雑貨の商品で使い勝手が悪い」という話が出て、「生協に伝えていますか」と聞いたら、「言わない」ということでした。食品でも雑貨でも、ちょっと「使い勝手が悪い」とか「こうならないか」と思った時、発信しますか。

白水（ゲスト）：一人が言っても、その商品に反映されるのか、何人かというように数が多ければいいと思いますが。カタログ見て、よさそうだなと思って、実際に手にすると違うなと思うような、そういう商品が押入にたまっています。カタログでしか見られないので、雑貨は手をつけないほうがいいのかなどという話も聞きます。返品すると、こちらが悪い、お手間をかけるし、自分が頼んでおきながらという気持ちもありますので。



中村さん

松山（ゲスト）：届いてすぐに出せればいいですが、ちょっと経ったり、保存方法が悪かったり、返品するのは1週間後というのでは、言わなくて買わなくなりました。

伊藤（ゲスト）：雑貨はないですが、以前に「もったいない企画」で冷凍の「千切りごぼう」が安かったんです。三つ利用しましたが、三つともガチガチに凍っていて、使うたびに、テーブルでごんごん割って、この量では少なすぎるとか、多すぎるとか思いながら、現在進行形で使っています。ごぼうが一塊で来ましたとは言えなくて・・・。

白水（ゲスト）：どこまで声を出していいのかということがすごく難しいですね。私も豚バラ肉のブロックが好きで、何回か利用していますが、脂肪率がすごく高く、見るからに脂肪で、安い時にまとめて買うと、よけい白いのがくるんです。気



松山さん

のせいかと思いますが、あまりにもひどいから、返品したいんですけど、それを言いだすまでに、これどうしようかとすごく悩んだことがあって、しばらく恐怖症になって、もうやめようと思いました。おいしいんだけど、どうしたらいいのか。

中村（インタビュー）：やっぱり、言い出しにくいものですか？

白水（ゲスト）：またかという感じもあって、私だけとか、他の人は言わないのとか、一つくらいがまんすればという気持ちがありますよね。脂肪率何%以下とうたってある割には、見るからにということがあったと、品質管理はどうされているのかと思います。それで勇気を出して言わないといけなと思います、度重なりとやめようかと思っています。

松山（ゲスト）：そういうことがあって、直接メーカーさんに話したことがあります。すると「返品してください」と言われますが、返品はしにくいんですね。一塊の中で、脂肪率は何%以下という基準で、スライスしていくとまばらになると言われました。こちらは「だからしかたがない」と聞こえ、安心して利用できないと思いました。脂身が少ないとラッキーというのでは。一つ一つのモノをみて管理してもらえれば安心して買えるのに。だから利用しません。

仲西（ゲスト）：カタログに脂身の率が何%と書いてあるのは知っていますが、特に脂身が苦手なので、肉は見て買いたいと思い、大丈夫そうなロースやミンチは頼みますが、量的に多かったり、バラ肉は絶対無理と思って、最初から利用しないものという感じになっています。肉とか、果物もそうですが、おいしいとはわかっていますので、だいたいはずれはないと思っていますので毎年頼むものはあります。それでも、今年はイマイチと感じると、次はやめようとなります。何か言うより、やめようと思ってしまいます。

中村（インタビュー）：伊藤さんは、ごぼう以外に何か「これやめた」という商品がありますか？ごぼうの話もこういう状態ということを伝えてないですか？

伊藤（ゲスト）：伝えてないです。煙たがられると嫌なので。私が言うとしたらステーションの人ですが、うるさい人という存在になりたくないの、これからも長いおつきあいなので、これくらいのことは黙っておこうと思っています。

中村（インタビュー）：でも実際は不便なんですよ？

伊藤（ゲスト）：そうです。ごぼうをいつも使うたびに「もう！」と思っています。

中村（インタビュー）：実は私も、今持っていますから、よくわかります。



白水さん

第2回岐阜のつどい 岐阜を知ろう! つながろう! 報告

文責 事務局

「石徹白の小水力発電と地域再生」

交流見学会

地域への思い、地域づくりを学ぶ!!

岐阜の地域を知ろう! つながろう! をテーマに、8月18日第2回岐阜のつどい「石徹白の小水力発電と地域再生」見学・交流会を行いました。小水力発電の発電システムをじかに見たり、地域再生のお話しをお聞きたり、地元のNPOの久保田正則さん、平野彰秀さん、その他沢山の人たちとあつく交流が出来ました。雷が鳴りましたが幸い天候も持ち、夏の日、内容の濃い企画となりました。



くくり姫の会の方たちによる食事を食べながら交流。

【 当日のスケジュール 概要 】

午前9時00分 コープぎふ 生協本部 出発
 11時00分 小水力発電の見学 石徹白での小水力発電を見学。質疑して、交流。
 12時20分 昼食懇談会
 13時00分 石徹白での地域づくりについてのお話し
 14時00分 意見交換終了
 14時15分 大師堂見学 14時45分 帰路につく。

小水力発電システムを間近に見学・体感。

石徹白の歴史もお聞きする。 太子堂にて



石徹白(いとしろ)って?

白山国立公園の南山麓に位置する標高700メートルにある小さな集落。白山信仰が盛んな平安、鎌倉時代は修験者の出入りで栄えた。「大師堂」にある「虚空像菩薩」は国定重要文化財に指定。主要農産物であるとうもろこしは糖度がとても高く大変好評。冬は3メートルを超える雪が積もり、ウィンタースポーツには絶好のロケーション。厳しい雪国生活が強いられ、過疎・高齢化が進んでいる。

= 石徹白の小水力発電・地域づくりのお話 =

NPO法人安らぎの里石徹白 理事長 久保田正則さん

NPO法人地域再生機構 副理事長 平野彰秀さん より

らせん型水車発電システム(移動型・投げ込み方式)

水の位置エネルギーを使って発電します。発電は(水の量×落差×重力加速度×効率)ですが、たとえばここは一秒間に200リットル、ドラム缶一本分の水が流れています。80~90センチの落差を使って発電をしている。ここにあるのは開放型水車といいますが、タービンにとじこめていく形ではなくて水車が露出した形のものになります。今ここでは最大800W、通常500W発電して24時間発電しています。トータルにすると同じくらいになります。一般の家庭で平均使用量1カ月3000KW、1日10KW、波はあるがほぼ一軒分の発電をします。



発電した電気をためての制御

いったんバッテリーにためて、使っています。これが全部、手作りです。大事なことは、電気の制御をいかに安定的にできるかということ。電圧が変動したらまったく使い物になりません。一番シンプルな格好ということで、直接直流に変換させて、直接バッテリーに入れてあります。今言われているスマートグリッドのような、その小規模版として各家庭で使えるように、せつかく作った電気を漏れなく使えるようにすることを研究する事が一番の課題だと思っています。

上掛け水車発電システム(定着型:バイパス方式)

落差3メートルで発電しています。最大出力2、2KWです。だいたい1700Wくらい、今、1635W発電しています。水が落ちているだけで、最大、家3軒くらいの電気を発電しています。もっと公共に役に立つもので使おうと作りました。この建物は農村加工所で、電気代を気にせずに使えるように作りました。とうもろこしの規格外品を使ってパウダーにしてパンとか料理に使う粉にしています。冬場は柿のチップ、みかんのドライフルーツなどの生産にも去年から取り組んでいます。自然エネルギーを取り込んだ6次産業化を、小さいながらもそういう形を私たちは目指しています。

**らせん式ピコ水力発電機 ピコピカ**

今、水が少ないですが、それでも電気がついています(街燈)。水車の形はらせん式と一緒にです。教育現場で電気の起こる仕組みをわかってもらうために、作ってあります。これでも5、6Wは発電しています。12人しかいない小学生が、ドライバーなど工具を使って組み立てました。

**=地域づくり、自分たちのペースで楽しくできることから=**

地域の人たちの一番の関心ごととは人口減少です。昭和30年代には1200人くらい人口がありましたが、今は250人を切るような状況になっています。このままだと集落は消滅してしまうだろうと予想され、そのためにどういふことをしていっていいのかなということで、地元の人たちがNPOを作られました。NPOの活動をやっていく中で、僕ら岐阜のメンバーと知り合う機会がありまして、このマイクロ水力発電の事業が始まりました。2009年に石徹白ビジョンというのを作成し、そのスローガンが「将来にわたっても石徹白小学校を残そう」で、今全校児童が12人なのですが、小学校がなくなると子育て世代が住めなくなるので、一気に衰退が進むだろうということで、清掃登山、文化祭、運動会、いろんな行事が小学校中心に行われています。



久保田さん(左) 平野さん

地域でいろいろな団体がいろいろな活動をしています。NPOとしては小水力発電の導入、この地域の自然や歴史のガイド、特産品の開発をやり、定住促進に向け、今後、山村留学をやろうと思っています。28歳の稲作農家の方が印刷してTシャツを作っています。くくりひめの会も2年前から地の食材を使ったカフェをやっています。石徹白ファンづくりということで、エコツアー、キャンドルナイト。修学旅行の民泊受け入れ、特産品の開発も加工所で始めています。あとは定住で空き家の情報を提供したりしているという感じですね。

30年後も小学校を残そうという「みんなで楽しくできることから」、なかなかすぐに成果はでなくて、すぐにお金は黒字にならない、やってみるとたいへんですが、みんなでやって、何よりも楽しくがすごく大事です。自分たちの

ペースで、みんなで楽しくできることからというのも無理をしない形でやっていこうということで、ここ2~3年はやってきました。少しずつ移住する人がでてきたりしている状況です。

巻頭言	くらしを語りあう会でのおしゃべり	田中義二	1
第3回「原発事故と私たちのくらし」連続学習交流会			2-4
私のくらしの中の生協商品2			5-6
第2回岐阜のつどい	石徹白の小水力発電と地域再生		7-8

2012年10月25日(偶数月25日発行)

定価200円

(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)

発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター

代表理事 川崎直巳

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP <http://www.tilki-kvodo.net/>